

霧の夜の風景に詠める歌

向ひの山脈に霧が湧き それがこちらへ移つて来る
月は今中空 雲は一ひら風もない
足下に辛夷の一本 その白い花かげを透いて
寮舎は遠く山峡に眠つてゐる
激しい議論の後 友は去り 私は暫くをこの美しい風景に見入る
君は口の酸つぱくなるほど人間を説いた 偉いと思ふ しかし
君はあの病床の夥しい肉塊を知つて得よう さうして自己を
生き乍ら腐つて行く亡んで行く肉体に
何の精神 何の立派な統一性があらう
否定し給へ 否定する事だ 否定し去つた後にこそ
新しく生れる血の滾りを覚え
肉の孕むのを知るだらう ああしかし・・・
霧がこちらの山を登つて来る 寮の灯はもう見えない
夜は三更 この風景の斜面に佇つて
私は心にはげしく立ちすくむ

(昭和十二年「山桜」六月号)